

目 次

はじめに / iii

目 次 / ix

謝 辞 / xiii

凡 例 / xv

I 青洲の「虚構」と「史実」 1

- 1 青洲の「虚構」と「史実」 / 4
- 2 妻「加恵」は失明したのか / 9
- 3 呉 秀三はなぜ『乳巖治験録』を改竄し、その合成写真を作ったのか / 19
- 4 伝記の著者たちは青洲の著述の原典を読んだのか / 31
- 5 最初に開発したのは「散薬」か「煎薬」か / 48
- 6 青洲が行ったのは「乳房切除術」か「腫瘍摘出術」か / 49
- 7 青洲の手術は絶妙だったのか / 50
- 8 青洲の自筆写本は『乳巖治験録』と『臨床記録』だけか / 51
- 9 「史実」はいかに変容して伝えられるか / 52
- 10 青洲は「陰謀家」だったのか / 54

II 青洲の医説と東洞の思想 57

- 1 青洲の『丸散便覧』と東洞の『東洞先生家塾方』 / 60
- 2 青洲の「奇方」研究と東洞の「方無古今」 / 73
- 3 青洲と東洞の「人事を尽くして天命を待つ」 / 81
- 4 青洲の「理」と東洞の「理」 / 92
- 5 『華岡青洲墓誌銘』と「内外合一」 / 102
- 6 仁井田好古の「内外合一」と浅田宗伯の「内外一理」 / 113
- 7 青洲の「活物窮理」と『青洲医談』 / 119

III 青洲の医術の限界 131

- 1 麻酔法の限界 / 134
- 2 外科手術の限界 / 142
- 3 医学思想の限界 / 151

Ⅳ 青洲の学統 163

- 1 教養の学統 / 166
- 2 内科の学統 / 174
- 3 外科の学統 / 180

Ⅴ 青洲の自筆写本『丸散便覧』(天明本) 197

- 1 青洲の自筆本の先行研究 / 199
- 2 自筆鑑定の特徴 / 201
- 3 筆跡の二面性 / 201
- 4 青洲の自筆史料の分類 / 203
- 5 「免状」と「丸散便覧序」(天明本)の筆跡の比較 / 203
- 6 「免状」と「丸散便覧序」の筆跡の比較 / 206
- 7 署名「華岡」の比較 / 209
- 8 年代の離れた史料は比較できるか / 211
- 9 『丸散便覧』(天明本)は青洲自筆の稿本 / 212
- 10 『丸散便覧』(天明本)の意義 / 213

Ⅵ 青洲の著述 215

- 1 『險証百問』 / 218
- 2 『傷寒論講義』 / 229
- 3 『瘍科辨畧』 / 240
- 4 『瘍科記聞』(『外科記聞』) / 244
- 5 『瘍科要訣』 / 247
- 6 『瘍科口訣』 / 251
- 7 『玄溪先生口授』と『玄溪先生乳岩夜話』 / 256

Ⅶ 『春林軒二十一種』と青洲華岡先生遺教本 261

- 1 青洲研究史における『春林軒二十一種』 / 264
- 2 『春林軒二十一種』と『華岡氏遺書目録』 / 266
- 3 現存する『春林軒二十一種』関連の写本 / 267
- 4 杏雨本の書誌 / 269
- 5 『瘍科神書』の杏雨本と家蔵本の比較 / 270
- 6 『瘍科瑣言』の杏雨本と家蔵本の比較 / 274
- 7 『産科瑣言』の杏雨本と家蔵本の比較 / 277
- 8 『痢疾瑣言』の杏雨本と家蔵本の比較 / 279

- 9 『春林軒丸散録』の杏雨本と家蔵本の比較／280
- 10 『青囊秘録』の杏雨本と家蔵本の比較／281
- 11 『奇方記聞』の杏雨本と家蔵本の比較／283
- 12 『脚氣翼方』の杏雨本，研医会本と家蔵本の比較／284
- 13 『禁方(拾)録』『続禁方録』の杏雨本，大同薬室文庫本の比較／286
- 14 『奇患録』の杏雨本，鸚軒本，富士川本の比較／288
- 15 玄調による『春林軒二十一種』の撰定と定誠による編集／297

VIII 青洲の社会貢献————— 301

- 1 青洲の枅屋平兵衛宛ての書簡／304
- 2 この書簡が書かれたのはいつか／304
- 3 門人の数を増やすためだけの依頼であったのか／306
- 4 「活物窮理」は「術」である／307
- 5 各国の最初の入門者／308
- 6 青洲に門人録を回顧する契機があったのか／311
- 7 「活物窮理の術」の普及と社会事業／311

IX 「麻醉をかける」という表現はいつから用いられたのか————— 313

- 1 「麻醉」の語史／316
- 2 「かける」の語義について／318
- 3 1849年以前の史料に現れた「麻醉」などに続く動詞／322
- 4 1850年の『亞的耳吸法試説』に現れた「麻醉」などに続く動詞／327
- 5 1851年から1868年の史料に現れた「麻醉」などに続く動詞／328
- 6 1869年以降の史料に現れた「麻醉」などに続く動詞／330

X 「麻」を冠する「麻醉」関連の熟語の語史的考察————— 333

- 1 華佗と「麻沸散」／338
- 2 漢字の「麻」に「しびれる」という意味が生まれたのはいつか／339
- 3 7世紀以降の中国の医書に見られる「麻痺」「麻木」などの熟語／340
- 4 竇材の『扁鵲心書』と「睡聖散」／344
- 5 李仲南の『永類鈴方』と「麻痺」／345
- 6 危亦林の『世医得效方』と「麻倒」「麻葉」／346
- 7 王肯堂の『証治準繩』と「整骨麻葉」／348
- 8 陳実功の『外科正宗』と「麻」関連の熟語／349
- 9 孫文胤の『丹台玉案』と「麻木」／350

- 10 高志鳳翼の『難波骨継重宝記』と「正骨麻薬」「草烏散」／ 351
- 11 中川修亭の『麻薬考』と「麻薬」／ 352
- 12 青洲の『乳巖治験録』と野村 鄂の『記青洲先生療乳巖』／ 354
- 13 二宮彦可の『正骨範』と各務文献の『整骨新書』／ 356
- 14 杉田立卿の『療乳巖記』と「麻睡之剂」／ 358
- 15 宇田川裕庵の『植学啓原』と「麻醉昏聩」／ 359
- 16 堀内素堂の『幼幼精義』と「麻醉」／ 360
- 17 杉田成卿の『亞的耳吸法試説』と「麻醉」／ 361
- 18 合 信 (Benjamin Hobson) の『西医略論』と「酣醉」／ 363
- 19 石黒忠恵の『外科通術』と「全身麻醉」「局所麻醉」／ 364
- 20 Meyer Saklad の講義と「麻醉学」「麻醉科」の誕生／ 365
- 21 著者による「麻醉科学」「日本麻醉科学会」の提唱／ 367

XI Seishu Hanaoka: His Achievement and Philosophy 369

- 初出一覧／ 391
- 参考文献／ 393
- おわりに／ 409
- 索 引／ 413